

論文概要書

田山花袋の研究——作品の形成基盤および形成過程をめぐる考察——

小堀 洋平

本論文は、一八九〇年代初頭の出発期から『時は過ぎゆく』（一九一六・九、新潮社）まで、およそ四半世紀にわたる田山花袋の文学的営為の内実を、主としてその間に執筆された代表的作品の形成基盤と形成過程の検討を通して明らかにしたものである。その際、形成基盤としては材源となった一次資料および影響を与えた海外の文学作品を、形成過程としては執筆における改稿の実態を主に検討し、そのようにして解明された実証的基礎に立ちながら、逐次、各作品の読解を行った。

序章「作家出発期において花袋が志向したもの——『野試合』を読んで水蔭君に寄す」をめぐって——では、幾多の変遷を経つつも以降の文学活動の基本的方向を決定づけることとなった、作家出発期における花袋の志向のあり方を、従来ほとんど知られていなかった最初期の評論『野試合』を読んで水蔭君に寄す』（『読売新聞』一八九一・九・一一）の分析を通して明らかにした。当時師事して間もなかった江見水蔭の小説『野試合』（一九一・八・二〇、春陽堂）を対象とする本評論において、花袋は先行する『野試合』評とのあいだに一定の共通性を確保することで論壇への初の登場となる自身の論を承認されやすいものとしながらも、以降の初期小説における自らの志向を予見させるかのように、「小児の無邪気」と「親子の情」の描出をきわめて高く評価することによって、それら先行評との間に差異を生じさせることに成功していた。また、当時最新の文学理論であった坪内逍遙の小説三派説や、森鷗外のハルトマンに依拠した規範美学をはじめとする同時代の批評言説を貪欲に摂取しつつ、それらを相互に結合させることで独自の評価軸を形成し、印象批評風の他の『野試合』評とは異なる次元で議論を展開しようとする試みも、そこには見られた。そして、同時代言説の受容と再構築によって自身の論の卓越性を獲得しようとするこうした試みは、当時の文壇における方向性としては、硯友社に属しながらもその主流からはむしろ距離をとり、鷗外の新声社への接近を意図するものだったと考えられる。

第一部「初期花袋文学の形成基盤」では、序章で確認された花袋の基本的な志向のあり方に、より具体的な肉づけを行うべく、一八九〇年代から一九〇〇年代初頭にかけての花袋の初期創作活動の背景を、形式と内容の両面から検討し、以降の章で論及することとなる代表的諸作品にも共通する文学的基盤の解明を試みた。

第一章「一八九〇年代の紀行文におけるジャンルの越境と人称の交替——『日光』を中心に——」では、従来論じられることの少なかった花袋の作品『日光』（一八九九・七、春

陽堂)を採り上げ、この作品が同時代における紀行文ジャンルの成立や、初期花袋における紀行文と小説の関係を考察する上で、重要な位置を占めることを確認した。その際、紀行文と旅行案内というジャンルの混合、これ以前の紀行文との間に見られる漢文学から西洋文学への引用・典拠の志向性の変化、風景描写を媒介とした一人称から三人称への人称転換の手法という三点に絞って、本作の意義を論じた。以上の諸点の分析によって、『日光』が、引用や人称転換といった語りの諸機能を通じて、「自然」から喚起された「詩興」を叙述するという同時代の紀行文作家達に共通する課題と正面から向き合った作品であり、さらに以後の花袋の小説の展開にも重要な影響をもたらしたものであることが明らかにされた。

第二章「一九〇〇年前後の花袋における「自然」の変容——太田玉茗宛書簡に見られる海外文学の受容を中心に——」では、前章において主として形式の側面から考察された花袋文学の形成基盤を、「自然」という内容の側面から論じた。一八九九年(明治三二)は花袋にとってセンチメンタリズムの破壊、そして自然主義への転換の出発点となった重要な年であるが、本章では、この年に書かれた太田玉茗宛書簡(早稲田大学図書館蔵)から窺われる花袋の読書行為の実態に注目し、海外文学の繙読が当時の花袋において、創作の源泉たる「自然」に触れる「旅」の代償として機能していたことを明らかにした。また、書簡中に触れられたツルゲーネフやゾラなどの西洋の文学作品の受容が契機となつて、この時期、花袋の「自然」概念が変容し、自然主義への傾斜が強まったことをも示した。なお、その際、柳田国男や永井荷風等、同時代作家における海外文学受容との比較によつて、花袋の読書傾向の特色をより明瞭に浮かび上がらせた。

第二部「主題とモチーフの形成基盤」では、『重右衛門の最後』(一九〇二・五、新声社)、「蒲団」(『新小説』一九〇七・九)、「一兵卒」(『早稲田文学』一九〇八・一)という一九〇〇年代の花袋を代表する三つの中篇・短篇小説を重点主義的に採り上げ、それぞれの主題とモチーフについて、二章ないし三章を割いて論じた。なお、それぞれの小説を扱った部分では、初めの一、二章(第三章、第五・六章、第八章)での実証的考察によつて明らかにされた各作品の主題とモチーフの形成基盤を踏まえつつ、終わりの一章(第四章、第七章、第九章)において作品本文の読解を試みるという構成をとつた。

第三章と第四章は『重右衛門の最後』を対象とする。

第三章「紀行文草稿「笠のかけ」について——『重右衛門の最後』論の前提——」で

は、『重右衛門の最後』論の実証的前提の一つを呈示することを目的として、この小説の素材となった一八九三年（明治二六）八月から九月にかけての信州旅行のことを記した紀行文「笠のかけ」花袋自筆草稿（早稲田大学図書館蔵）の翻刻と検討を行った。その上で、「笠のかけ」草稿と『重右衛門の最後』の比較を行い、『重右衛門の最後』においては、「笠のかけ」に見られる友人祢津栄助や武井米蔵との自然観の共同体が、語り手「自分」の成長、ひいてはそのモデルと目される作者自身の成長を劇的に語るために、花袋によって破壊されていることを確認した。そして、その共同体を犠牲として語り手が手に入れたものこそ、冒頭場面に示された海外文学について語り合う文学サークルという新たな共同体であり、作者花袋にとっては、そのサークルの構成員と同様の教養を持つはずの『重右衛門の最後』の想定読者の共同体であったことを論じた。

第四章『重右衛門の最後』における村と語り手——優位性とその隠蔽——」では、従来の『重右衛門の最後』論が、作品における基本対立を重右衛門と村の共同体との間に措定していたために、そのいずれが最終的に勝利したと見做すべきかについて、解決不可能な困難に陥っていたことを踏まえ、作品における「事柄の意味」と「語り手の意図」を区別した上で、この両者の間に基本対立を設定し直すことよって、従来の困難の解決を試みた。『重右衛門の最後』とは、優位性を持つ村の働きかけによる重右衛門の破滅という本来の事柄の意味が、自身の文学者としての卓越性を示すという語り手の目的のもとに、重右衛門に体现された「自然」の力の勝利という語り手の意図へと変形される物語なのである。

第五章から第七章までは「蒲団」を対象とする。

第五章「見えざる力」から「蒲団」へ——岡田美知代宛書簡中の詩をめぐって——」では、「蒲団」の芳子のモデル岡田美知代に宛てられた花袋の書簡のうち、一九〇五年（明治三八）（推定）六月七日付書簡に含まれる詩「見えざる力」、および同年七月六日付書簡に含まれる無題の詩二篇の読解を通して、「蒲団」執筆の根底に不可解な力による自我の破壊という主題が存在したことを明らかにした。なお、その際、これら三つの詩と「蒲団」をつなぐものとして、当時象徴主義を積極的に評価していた花袋がその一部を翻訳したヴェルレーヌの英訳詩集、特にその挿絵を採り上げ、そこに示された室内風景のイメージが有名な「蒲団」結末場面に影響を与えた可能性を検証した。

第六章「暴風・狂気・チェーホフ——「蒲団」執筆の背景とモチーフ——」は、「蒲団」執筆の背景とモチーフを、前章と同様に、比較文学の方法を振り入れながら考察したものである。初めに、「蒲団」執筆中の一九〇七年（明治四〇）七月末から八月初めにかけて、

花袋が編集に従事していた『文章世界』八月号の読者投稿欄を手がかりに、チェーホフの英訳短篇集『黒衣の僧』に対する花袋の関心を実証した。その上で、国木田独歩「都の友へ」、B生より「『新小説』早稲田号、一九〇七・七・一五）をはじめとする同時代作品との比較を通して、「蒲団」における「暴風」というモチーフが、チェーホフの影響下に「狂気」の象徴として用いられた可能性を検証し、「蒲団」の新たな側面に光を当てた。

第七章「蒲団」における二つの道——「破壊」と「犠牲」の相克——」では、「破壊」と「犠牲」の対立を軸に、「蒲団」の作品論を試みた。その際、初めに、「蒲団」の基本構図を、芳子を自らの「所有」とすべく、その「時機」を捉えようと争う男達をめぐる物語として規定した。つづいて、そのような構図にもかかわらず、時雄、田中、芳子の父親の三者が、いずれも芳子の「所有」という所期の目的を達成できずに終わることに注目し、特に時雄において、そのような「所有」のための他者の「破壊」という道に対立する選択肢として、「犠牲」の道への可能性が存在したことを論証した。しかし、「基督教信者」であるにもかかわらず、キリストの「犠牲」の道とは対照的に、自らの「自我」の欲望を正当化しようとした田中、父親、そして芳子自身の傾向に影響されて、時雄は最終的に「破壊」の道を選択した。だが、その道は逆説的に、結末場面における自らの「自我」の「破壊」をもたらすものであったことが、本章の分析によって明らかとなった。

第八章と第九章は「一兵卒」を対象とする。

第八章「一兵卒」とガルシン「四日間」——「死」「戦争」「自然」をめぐる考察——」では、「一兵卒」におけるガルシン作・二葉亭四迷訳「四日間」『新小説』一九〇四・七）の受容を論じ、次章の作品論の前提を準備した。「一兵卒」においては、『第二軍従征日記』（一九〇五・一、博文館）では有効に活かされなかった兵站病院の「臭気」という素材が導入され、兵士に衛生観念を内面化する一方で傷病兵に対し十分な衛生環境を整備することの出来なかった日露戦時の日本軍の実情が、兵士の身体のレベルで描き出されることとなっているが、その背景には、同様の素材を効果的に用いたガルシン「四日間」の読書体験があったと考えられる。また、「死」という重要な主題をめぐっても、描かれた個々の情景のみならず、表現手法やモチーフの選択、視点のあり方に至るまで、「一兵卒」には「四日間」受容のあとが認められる。その一方で、「四日間」にはない「一兵卒」の特色として、末尾において主人公の「死」を語らなければならなくなった時、無関心に進行する「戦争」および「自然」との断絶のうちにその「死」を位置づけている点が指摘できることを論じた。

第九章「一兵卒」における「穴」の世界——その時空間と身体をめぐる考察——」では、本文を逐一参照しながら、「一兵卒」の作品世界を「穴」の世界として読解した。本章において示される「一兵卒」の読みの大枠は、一兵卒が戦場という「穴」の世界からの脱出を目指しながらも、その可能性に絶望し、ついに自ら空虚な「穴」と化して死ぬ、というものである。無論、そのような価値の低落し意味の空虚化した閉ざされた世界においても、一兵卒は世界と自己の再構築を試みる。彼はそれを、自己の身体の確認を通して行おうとする。そして、その「自己の」という規定を創り出すために、彼は自らの内的生活史の再構成を試みる。だが、最終的にその試みは破綻し、単なる生命機能、すなわち「自己の」という規定を欠いた空虚な身体だけが、一兵卒に残されることとなり、その生命機能も結局死によって終焉することとなるのである。

第三部「描写方法の形成過程」では、「生」(『読売新聞』一九〇八・四・一三〜七・一九、後に『生』一九〇八・一〇、易風社)、「妻」(『日本』一九〇八・一〇・一四〜一九〇九・二・一四、後に『妻』一九〇九・五、今古堂書店)、『田舎教師』(一九〇九・一〇、左久良書房)という、一九〇〇年代末の花袋を代表する三つの長篇小説を、描写方法の形成過程の検討を通して読解した。なお、これより前の時期に属する『重右衛門の最後』、『蒲団』、『一兵卒』という作品を扱った第二部において主題とモチーフが中心的に検討され、ここでは主に描写方法が検討されるのは、創作における花袋自身の関心の変化に沿ったものである。従来指摘されているように、「自然」、「見えざる力」、「死」といった主題と、その主題を構成するモチーフ群の探究に重点が置かれた「一兵卒」までの時期に対して、「生」以降の時期においては、平面描写論の提唱に代表されるように、それらの主題とモチーフをいかに効果的に表現するかという描写方法をめぐる問題に、花袋の関心の重点が移行したと考えられるのである。

第十章「風景の俯瞰から自然との一致へ——「生」改稿をめぐる——」では、「生」の改稿問題を論じた。「生」は、従来、その新聞初出形と単行本所収形との間に、この作者のものとしては他に類例がないほど、多くの異同が認められることが指摘されてきた。しかし、その異同が作品解釈にもたらす影響については、十分研究が尽くされているとは言いがたい。そこで本章では、この課題に応えるため、初めに改稿時期の確定を図った上で、単行本において削除された初出第五十四回連載分の本文を分析し、その箇所が高所からの風景の俯瞰という描写枠組を持つことを論じた。また、ゴンクール『ジェルミニ・ラセル

トウ』花袋旧蔵本（田山花袋記念文学館蔵）の類似箇所との比較により、両者の描写の類縁性ととも、「生」第五十四回においては「暗い家」から脱出しようとする子等の欲望が前景化されていることを明らかにした。最後に、右のような特質を持つ初出第五十四回が削除されたことで、作品の基調を成す「家」に内在する視点が一貫されると同時に、相対的に後の第五十六回における「自然」との一致が強調されたことを確認し、この改稿を「風景の俯瞰から自然との一致へ」という方向性のもとに把握することを試みた。

第十一章「思想」と「生活」の交錯——「妻」改稿をめぐる——」では、前章で扱った「生」に続く長篇である「妻」における改稿の意味を論じた。単行本『妻』においては初出「二十一の三」が全文削除されているが、そのことが結果的に作品全体にどのような影響をもたらしたかといえ、主人公勤の内言のみで構成された部分の後で、語り手の語りによって主人公の変化を改めて裏付けるこの箇所が削除されたことで、主人公の変化に客観性を見出すのが困難になったといえることができる。これにより、単行本では、削除箇所の前部分における勤の非常に力の籠った内言も、単に一時的な興奮、熱狂にすぎないかのような印象が与えられたといえる。その部分は、勤のニーチェ主義への心酔という内容を持つが、そのようなニーチェ主義の「思想」に代わって単行本において勤の変化の要因とされたのは、長兄の言葉に代表される年長者の「生活」の智慧とでもいうべきものへの共感であった。そのことは、初出「十七の四」における長兄に対する批判的言辞が、単行本では弱められている点からも窺われる。なお、こうした傾向は、「思想」の新しさより「生活」の年輪の積み重ねを重視し、それを自身の理論の基礎に据えようとしていた当時の花袋の平面描写論における志向とも響き合うものであったといえる。

第十二章「写すことと編むこと」のあいだ——『田舎教師』における風景描写の形成——」では、『田舎教師』の最大の特徴とされる風景描写が、いかにして形づくられたかを明らかにした。『田舎教師』の風景描写の基礎となった各季節の原型的イメージは、一九〇八年（明治四一）一月から十二月まで一年間にわたって、増刊号を除き毎月『文章世界』に連載された小品「文章月曆」において形成されたものと考えられる。「文章月曆」では、実感を写すことと記録を編むこととの融合の上に四季のイメージが形成されているが、それを再び巧みに編み上げることで成り立っているのが、『田舎教師』の風景描写である。そして、そのような原型的イメージに具体的な肉づけを施す役割を担ったのが「踏査」という方法であった。その方法の内実とは、「旅の日記帳」に写し取られた素材を縦糸とし、主体の明示されない知覚表現を横糸として、一つ一つの風景描写を編み上げてゆくものだったが、こ

ここで重要なのは、そうした方法が『田舎教師』執筆に際して突然に現われたわけではなく、『田舎教師』とは直接関わりのない素材に対しても、花袋によって旅行の都度繰り返し試みられたものだった、という点である。さらに、『田舎教師』における風景の前景化は、材源である小林秀三日記の後半部分から「感想」と「情緒」の要素を排除し、主として独歩「武蔵野」(『武蔵野』一九〇一・三、民友社、初出「今の武蔵野」『国民之友』一八九八・一、二)の影響下に写し取られた季節の風物を選んで作品に編み込んでゆく方法によって、生じたものであった。このように、『田舎教師』の風景描写の基底には、ただ風景を写すことのみが存在したわけではなく、執筆過程における写すことと編むことのあいだからこそ、『田舎教師』の風景は立ち現われてきたものだったのである。

終章「花柳小説から『時は過ぎゆく』への展開——『燈影』の初出「春の名残」を中心に——」では、初めに、今日まで長らく正確に把握されていなかった長篇小説『燈影』(一九一八・一二、春陽堂)の初出が、『東京毎日新聞』に一九一五年(大正四)四月二十日から八月七日まで全一一〇回にわたり連載された「春の名残」であることを指摘した。そして、その新事実の確認を基礎としながら、一九一〇年代前半に多作された花袋の一連の花柳小説、および同時期の花袋による翻訳『マダム・ボヴリイ』(一九一四・六、新潮社)との比較を通じて、本作が時期的に見ても内容的に見ても、花袋の作品系列において、『田舎教師』から花柳小説、そして『時は過ぎゆく』への展開を解明する鍵となる重要な作品であることを明らかにした。時代の閉塞状況における一青年の死を描き出した『田舎教師』と、同様の長い閉塞状況を黙々と生き延びる一老人を描き出した『時は過ぎゆく』との間には、花柳界の深い閉塞の中で生き続ける芸妓の姿の「春の名残」における発見にまで至る、一連の花柳小説の試みが不可欠であった。花袋は「晴れた日の午前」(『文章世界』一九一七・四)において、『時は過ぎゆく』を自評して「漂流者の微かな叫声」、あるいは「救いを求めても何うすることも出来ないものゝ声」と言っているが、主人公良太の、抽象的観念に動かされることのけっしてない、忍耐強い生の継続の姿こそ、救いのない閉塞状況への消極的だが純粋な抵抗の典型として、花袋が呈示したものであったと考えられる。